コクトオの『声』その他を聴く

岸田國士

青空文庫

最近、仏蘭西版の新しい舞台のレコオドを幾枚か聴く機会を与へられた。

コクトオの「声」はベルト・ボヴィイといふ女優、ミルボオの「事業と事業」を例のフェロオヂイ、ラシイヌの「アンドロマアク」を名悲劇女優バルテといふ風に、僕の耳と心は、再び、十年前の巴里へ舞ひ戻つた次第だが、僕は今ここで、この晩の楽しく、且つ、胸を打たれた数刻の印象を物語らうとするのではない。

何よりも先に云ひたいことは、僕が嘗て仏蘭西の芝居を観、俳優の演技を通じて、戯曲の立体化――殊に、書かれた白の肉声化といふものにある標準を与へられ、爾来、戯曲を読むたびに、舞台の聴覚的幻象（イメエジ）がほぼそれに近く浮ぶといふ自信を得たつもりでゐたのであるが、十年を経た今日、読んで間のない戯曲、例へば、コクトオの「声」や、パニョオルの「マリウス」などが、俳優によつて、かくの如く肉声化されようとは全く思ひ及ばなかつたといふことだ。一口に云へば、読んだ時より、数層倍面白くなつてゐるので、僕は愕き、面食ひ、自分を疑ひはじめた。しかし、なるほど、心を落ちつけて考へてみると、十年前に通ひつめた仏蘭西の舞台が、僕を惹きつけ、つかみ、揺すぶつたのは、実にこれなのだ。現に日本の舞台を観て、仏蘭西のそれとの距りをはつきり感じ、絶えずそのレベルを仰望しながら、さて、年月を経るに従ひ、総ての印象記憶がさうである如く、僕の舞台的印象（イメエジ）も亦生気と密度を失ひ、一種の「捉へ難き昔の面影」となり終つてゐたに違ひないのである。今、久々で、かのベルト嬢の、フェロオヂイ翁の、そしてかのララ夫人の声と調子が「生なましく」この耳に響いて来るに及んで、総ては急に蘇つた。これでこそ、語られる言葉だ、俳優らしき俳優だと感じさせ、これでこそ、作者も戯曲を書く張合があり、また、これでこそ、芝居は衰へず、劇場は兎も角も芸術的使命を果してゐるのだと、今更ながら、仏蘭西俳優の演技が到達したレベルに嫉妬をさへ感じたのである。そして、同時に、僕自身、乏しき才能をもつて劇作を続ける以上、せめて、自分の書いたもの、人の書いたものが、この程度に肉声化さるべきものであることを、いつまでも念頭に刻み込んでおかなければ、結局、目標を見失ふことになるだらうと、やや空おそろしい気がして来た。

が、それは、実際、自分だけの問題ではなくて、日本の新劇全体に関する、痛切な問題であるかもしれない。殊に、俳優諸君は、この目標に対して、今はつきり、眼を据ゑるべき時機だ。今までの新劇は、いはば僕等の幻象（イメエジ）にやつと浮ぶ程度の舞台を見せてゐたのである。俳優の立場からは、そんなことでは駄目なのである。それで芝居が面白くならう筈はない。舞台が独立した魅力を発揮し得る道理はないのである。

最後に、ララ夫人が、「森」と題する男女混声の詩的朗誦に於て、甚だ示唆に富む試みを企て、「言葉の交響楽」ともいふべき一新形式を組立ててゐるのを知つた。僕が予て考へてゐた「純粋演劇」の方向に、正しく一歩を踏み出したものとして甚だ興味を惹かれたが、かういふ先駆的な努力を絶えず続けてゐるララ夫人に、僕は遥かに敬意を表する。

ただ、この方面で、今後どれだけの発展が期待されるか、今のところ、僕には見当がつかぬ。（一九三三・五）

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集22」岩波書店
1990（平成2）年10月8日発行
底本の親本：「現代演劇論」白水社
1936（昭和11）年11月20日発行
初出：「劇作　第二巻第五号」
1933（昭和8）年5月1日発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志
2009年9月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

コクトオの『声』その他を聴く

岸田國士

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/